三十五センチ下の〇〇点

白い黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三十五センチ下の〇〇点

【Ｎコード】
Ｎ８０７５Ｕ

【作者名】
白い黒猫

【あらすじ】
女って、すぐにムクれる、キレる、俺にとっては面倒な生き物でしかない。でも月見里百合子という女性は、びっくりする程おおらかで、なんかいつもニコニコしている？！　この女性の怒りのツボってどこにあるの？　面白いので観察してみるとに。大陽渚の三十五センチ下には未知の世界が広がっていた？　近距離恋愛シリーズ第四弾！まったく前作しらなくても楽しめます。

接触点（前書き）

近距離恋愛シリーズの第四弾。それなりに重要な人物のわりに存在感がない、大陽渚を主人公にした物語を書いてみました。『半径三メートルの箱庭生活』のサイドストーリーです。黒沢明彦、星野秀明とは違った感じに見える、月ちゃんを楽しんでいただければ嬉しいです。

接触点

＞i２８３８９―１６０３＜

女ってとんでもなく面倒な生き物。それが俺の正直な認識だった。
まず一番身近にいる女性である妹は、非常に我が儘。何も家の事もしないくせに、文句だけは一人前で態度もデカイ。社会人になっているのに、両親を連れて一緒に買い物にいっては服とかバックとかを買ってもらい、そんな状態が当たり前だと思っている。そして一人娘ということで両親が甘い事を良いことに、自分の意思が通るのが当たり前と思い、そうならないとキレる。ほっときゃいいのだが、俺もそれを冷静に指摘しするので、ますます爆発させ大喧嘩となってしまう。世間で妹が可愛いとか言っているヤツが、正直羨ましい。可愛いと思った事が俺にはない。

今まで付き合ってきた彼女だって揃いもそろって怒りっぽかった。『大陽（おおよう）くんは、女心まったく分かってない』『デリカシーがなさ過ぎ』と不満をすぐに口にしてくるのだ。
仕事で休日会えなくなったといったら怒り、俺の着ている服がダサイから恥ずかしいと怒り、話を聞かないと怒り、話がつまらないと怒り、怒る場所をいつも探しているかのような状況に俺もウンザリしてくる。コチラが言葉を返すと喧嘩になり、それを繰り返し険悪になっていき別れてきた。
女性と付き合う事が癒しどころか、逆にストレスになるというもの。
意外と独り身の方は、自由できままな生活を楽しめるというのも皮肉なものである。

俺は会社で自分のデスクで先方からの回答待ちの為、手が空いてしまった時間ネットサーフィンをし、ニュースや映画情報をチェックしていた。
そんな時に机の上にあった携帯が震える。くだらないＤＭかな？と思ったものの、つい見てしまうのが現代人の悲しい習性。見てみると、『月見里百合子』と画面に表示されている。
幼なじみ？　チョット違うか、小学校時代の同級生の名前がそこに表示されていた。先月の同窓会で会ってから、互いに映画好きということでメールのやり取りを楽しんでいる、そんな関係。所謂メル友といのだろうか？

『〔スナッチ〕観てきましたよ！　イギリスのコメディーって独特のノリとテンポが変で、それが面白かったです。コメディーだし大陽くんも楽しめそうです！
〔デスペラード〕どうでしたか？　バンデラスが無駄に格好良かったでしょ？』

脳天気そうな彼女の口調そのままの文章につい笑ってしまう。一回しか合った事ないけど、なんかずっとニコニコとしていて、惚けた事を言っては周りを笑わせている女性だった。

『なら、今度観に行ってみようかな。
そうそう「デスペラード」観ました。確かにバンデラスは無駄に格好良かったよ。
でも流石に俺は男だから月見里さんの言うように「キャー、バンちゃん素敵〜」とはならなかったけどね――』

暇だったこともあり、直ぐに返信を打ち始める。

『たまには、一緒に映画でも観に行く？』

アレ、なんか勢いで余計な事を最後に書いたような気がする。送った後に気が付いたけど、そのタイミングで仕事が動きだし、そのまま晩ご飯を食べる時間もないまま、朝までの作業が始まってしまった。

営業が悪いのか、相手の説明が悪いのか、よくある『言った』『言わない』の今更の仕様変更。先に言ってくれれば、その事も想定したうえでプログラムも組めていればここまで苦労もしなかったのだが、結局修正といういうよりもほぼ作り直しに近い作業にホトホト疲れ果て、始発の電車に揺られているときに携帯に月見里さんからの返信が来ているのに気が付いた。

『かまいませんよ。なら今週でも行っちゃいますか。
何か観たい作品ありますか？』

一瞬ボーとした頭で、何の話だったけ？　と考え映画の事かと思い出す。今週末公開されている映画が何だったかも思い出すのもかったるい。

『ＯＫ～！
映画は、月見里さんが観たいのでいいよ』

そう返信しておいた。微妙に好きな映画の方向が違っていて、彼女と好きな映画って俺にとってあまり面白くないものが多い事をこの時すっかり忘れていた。

※　※　※

その週は最悪だった、仕事が荒れまくり。今日こそは早く帰りた

いと思うものの、仕事が大きく動くのが決まって夕方からで、帰るに帰れない日々が続いていた。というか今週その日の内に帰れていない。

一旦、先方に作成したところまでのデーターを送り返事待ちの間、ボーとした頭で携帯の画面を眺めていた。

『上映スケジュール見てたら［シングルマン］今週末で終わりそうなのに気がつきました。
それでも良いでしょうか？
大陽くんというか、男性は苦手そうだけど大丈夫？』

（シングルマンって、どんな映画だったっけ？）

なんか聞いた事あるような気がするけれど、いかんせん疲れて思い出せない。タイトルからいって、独身男のドタバタコメディーかな？　と俺は勝手に解釈する。

『いいよ～ソレで。
面白そうだよね。待ち合わせはどこにする？』

激務の合間に、月見里さんとまったりとしたメールのやりとりを続けている内に、土曜日に渋谷で待ち合わせるとに。

そういえば女の子と映画いくのって一年ぶりくらいかもしれない。しかし中高生でもないからそんな事にワクワクする時代もとっくに終わっているし、平均睡眠時間二時間くらいという一週間を過ごした俺は、何の感情の揺れもないまま土曜日を迎えることになった。

月見里さんも、一緒に映画を観に行くという事に関しては、同じくらいフラットな気持ちなのだろう。

『今週仕事が荒れていて、もしかしたら土曜日も出勤になるかもしれない』

そんなメールを木曜日にしたところ、忙しくて大変な事への同情の言葉はあったけど、残念そうでも、一緒に映画行かなく済んだとホッとしたワケでもない、クールな感じのメールが帰ってきた。俺が休みであろうとなかろうと、彼女は『シングルマン』の映画を楽しむ休日を過ごす。俺が『いる』『いない』は大した問題ではないらしい。

『春眠暁を覚えず』という言葉があるが、この週は、春だというのに暁のインパクトが何故か強い一週間で、暁を感じて眠りにつくという生活が続く。

約束の日も仕事が終わったのは朝四時だった。もう身体は限界で動きたくもなかったので七時まで自分のデスクで仮眠をとり、そしてマンションに帰った。シャワーを浴び、冷蔵庫から出したコーラを飲み少しスッキリした所で着替えて渋谷へと向かう。自分からした約束だし、疲れているからと断るのもなんか悪い気がしたから。

あくびをしながら渋谷の待ち合わせ場所に向かうと、待ち合わせ時間五分以上前だというのに月見里さんは既に待っていた。

細身のジーンズに、ブルーのボーダーのインナーにカーキーの上着に鮮やかなブルーのバックという、なんとも軽快な格好だった。女の子らしいとは言えないけれど、ショートヘアーの彼女によく似合っていた。

俺に気がつき、嬉しそうにニッコリと笑い手をブンブンとふってくる。その明るい笑顔で、眠気と疲れがチョット吹き飛んだ気がし

た。身長は百五十センチちょっとしかなさそうだけど、元気があって妙な存在感がある。

「久しぶり」

メールをしているから、気がつかなかったけどそういえば会うのは一ヶ月ぶりになるのかもしれない。挨拶を返す俺に、「でも、良かった〜」心底嬉しそうニコニコしている。

「ん、何が？」

「実は、久しぶりで、大陽くんの顔どんな感じだったか忘れていて……見つからなかったらどうしようかと心配してたの」

俺はその言葉に、苦笑するしかない。そんなに印象薄いって言われたのは、生まれて初めてだ。身長が百九十センチあって、ガタイもよいことから、『威圧感ありすぎる』と、文句を言われたことはあっても……『いるかどうか判断出来ないかも』なんて言われた事は初めてで驚く。

嬉しそうな彼女の笑みは、俺が映画にこれた事ではなく、俺を発見出来た事にあるようだ。

「でも、デカい人が近づいてきて、あ！　コレだ！って、ピンときたの」

「目立つ体型で良かった」

月見里さんは、『だね！　その体型は便利でいいよ待ち合わせには！』といいながら頷く。彼女の脳天気な笑顔につられ、俺もつい笑ってしまう。

「じゃ、とりあえずチケット押さえてから、お昼でも食べますか！」

そう言って、彼女は力強く歩き出す。劇場の場所を知らない俺はその後をついて行くことにした。

接触点（後書き）

シリーズ第四弾とありますが、内容的には、弾三段よりも前の物語です。時代的には、月見里百合子の社会人三年目の春から夏の物語です。

より詳しく言うと『半径三メートルの箱庭生活』の第一章、『伸ばした手のチョット先にあるお月様』の三章の裏で繰り広げられていた話です。

特異点

『愛する者を失った人生に意味はあるのか？』

映画館につき、俺は『シングルマン』のポスターに書かれたそのコピーで、自分考えていた映画の内容とは、ずいぶん異なったモノであった事に気がつく。

（『生と死と愛を哲学的に問う』って……う、凄くつまらなそう）

そう思ったけれど、嬉しそうにしている月見里さんの顔をみていると、そうも言えない。

「監督のトム・フォードはファッション・デザイナーだから、やはり美意識の高い作品になるんだろうね～楽しみ」

チラシをみると、その日を『人生最後の日』と決めた男の一日を描いた作品なようだ。

「そうなんだ」

「グッチとかイブサンローランで活躍していた程、大物デザイナーなの。こういう異業種監督の作品というのも、より個性のある映像に楽しめていいよね。

大陽くんは『フローズン・タイム』って映画知ってる？」

なんか、ネットで評価は高かった作品というのは知っているけれど、俺はその作品も観ていない。

「いや、でもけっこう面白いらしいね」

月見里さんは、ニコニコとした笑顔のまま小さく二回頷く

「そうなの、でね、その作品の監督もショーン・エリスといって、ファッションカメラマンなの。瞬間、瞬間といった風景が面白く表現していて、カメラマンという人種の眼からみた世界の見え方というのが楽しめるの」

ネットで紹介されていたその作品の画像や動画が、確かにクールで素敵だったのを思い出す。

「なるほど、今度みてみようかな〜」

「お勧めだよ！」

ポンポンとしたリズムで、映画を語れるというのはなんとも楽しくて心地よい。でも、その彼女の長閑な心地よさが、俺にとんでもない過ちをさせてしまう。

そしてこの時くらいまでは、徹夜明けの人にありがりな、逆にテンションがあがり元気という状態だった。しかしこの後心地良い空調に、薄暗く叙情的な音楽と映像の映画が始まったあたりから、俺の身体は疲労を思い出す。

このとき観た映画は、たぶん良い映画なんだとは思う。でもなんともゆったりとしたテンポで、主人公の静かな視点進んでいく物語は、俺を夢の世界へと心地よく誘っていった。

ふと、周りが動き出す気配で目を覚ます。スクリーンにはエンドロールが流れ、気の早い観客が退場を始めたようだ。申し訳いけれ

ど、最初の五分くらいの映像しか覚えていない。コッソリ隣を見ると、しみじみとした様子で月見里さんは一心にスクリーンを見つめている。

（良かった、俺が眠りこけたこと気がついてない？）

俺は胸を撫でおろす。月見里さんが、俺の視線に気がついたのかコチラをチラっと見る。

「なかなか、面白かったね」

月見里さんは感動している様子なので、そう言っておく。彼女はその言葉になぜか『えっ』という顔をして、そのあと苦笑する。

「そうだね、私はすごく好きな映画だった」

月見里さんの含みのある言い方と、笑いながらも意味ありげに見上げてくる視線で、しっかりバレていた事を察知する。でも彼女はそれ以上は嫌味を言うでもなくこの件は流すことにしてくれたようだ。映画の後に関わらず観た映画の話題を一切できない俺に気を遣ってか、そのあと違う話題をふってくれて、俺たちは平和に会話をしながら劇場を後にした。

そこで十分反省した筈なのに、そのあと夕飯を食べにいった焼き肉屋さんでも同じミスを繰り返す。

俺の一週間の仕事の様子を聞いた彼女の『疲れていたんだね』という気遣う言葉に、『ならば、元気注入しよう！』と俺が選んだ焼き肉食べ放題の店で……。

別に酒を飲んだわけでもない。月見里さんとの会話も楽しかった。

しかし彼女の落ち着いた声のトーン。そして転がるように続く会話。それが耳に心地よかったのがいけないのか、俺は徐々に虚ろになっていき、意識を手放し眠り込んでしまった。

ふと我に返ったときは一時間近くの時間が過ぎていた。恐る恐る前をみると、困ったような顔の月見里さんがいた。

いくらなんでも、一緒に出かけて相手を放置して眠ってしまうって失礼すぎる行動だろう。長年付き合ってきた気心しれた友達であるならともかく、知り合って二ヶ月ほどで、会うのも二回目の相手にこんな事されたら不愉快だったはずだ。

俺が目を覚ましたのをみて、月見里さんは少しホッとした感じで笑った。

「大丈夫？　もう帰る？　それともまだ少し時間あるから肉食べてから帰る？」

コレは流石に怒られても何も言えないと思っていた俺は、月見里さんのその言葉にびっくりする。

そして店員さんに頼んでもってきてもらった冷たい水を俺にそっと差し出す。

「あ、ゴメン、なんか……。つい……。折角だから少し食べてからにする」

俺のその返事に、何故かブッと吹き出す。

「ううん、あまり食べてないものね、はい」

そう言って、ニッコリと笑ってメニューを俺に手渡した。

怒りっぽい女性しか知らない俺は、月見里さんのこの言動にに衝撃を覚えていた。

その後険悪になるわけでもなく、再び長閑な会話が二人の間で始まる。

（コイツってどんだけおおらかな女なんだ！　大物かもしれない）

俺は新種の生物を発見した類の興味を、月見里さんに対して覚えた。

特異点（後書き）

※注　半径三メートルとはかなり状況違うと思われるかもしれませんが、
コチラはあくまでも大陽渚の視点でこう見えていたとしてください。

留意点

月見里さんとの交流はその後も、同じようなペースで続くことになる。週に何通かのメールのやりとりを楽しむという感じ。彼女から映画の誘いなんてあるはずもなく、ただ互いに好きな映画の感想を語りそれにリアクションをするという状態。

彼女がやっているという、映画ブログを覗いてみる。『月夜の映画館』という名前のブログで、ウサギのイラストがついた可愛い見た目とは裏腹にその内容はマニアックで濃い。メールでも時々感じる事があるけれど、かなり厳しい映画の見方をしてくる。文章を読んでいると実は性格はシビアで結構キツいと思える節もある。

俺はそれなりに楽しんだ映画でも、厳しい意見を言っていてビックリ驚いたりもした。

潔癖な所があるのか、下品・えげつないといった方向の内容は受け付けないようだ。また主人公がひたすら悲劇に見舞われ救いがない監督がサドな内容にも拒絶反応を示す。

ありきたりなベタな展開というのも嫌いではないらしく無邪気に楽しんでいるのに、ハリウッド超大作的で大味のモノは好きではないようだ。

こうして、俺は月見里さんのメールやブログの文章の行間から、彼女という人間を解析していく。

彼女の怒りのツボ、感動のツボ、笑いのツボといったものが、俺とかなり違っている所が面白い。この映画のソコを面白がるんだ！とか、ソコを気にするんだと、自分との感覚の違い、他の女性とのズレを楽しんでいた。

彼女があの状況に怒らなかったのは、彼女にとって俺が、知人程度でどうでも良い存在だったという事もあるのかもしれない。

それを「しゃあない」と思う反面、「なんだかな」と思う自分も

いる。

そして、俺は汚名返上のため、ほとぼりが冷めたかなと思われるアレから一ヶ月、五月の中頃に月見里さんにデート？　の誘いメールを送る。

『渋谷で。「ＳＦＸの全て」という展示会があるんだ！　ハンス・ルドルフ・ギーガーの原画とかも展示されるんだって！　実際に撮影で使われたエイリアンとかも登場だって　コレは外せないよ！　一緒観に行かない？　ブログのネタにもなりそうだし、どう？』

コレで来るがどうかで、俺が彼女にとって友人なのか、面倒な知人でしかないのかが判断できる。

『面白そうですね！　見てみたいです。渋谷で美味しそうなお店も探しておきます！』

その返事と文章に、内心ホッとする自分がいた。

別に誤解ないように言っておくけど、月見里さんに気があるというわけではない。しかし友情関係であっても片思いというのは悲しいものである。

そして、睡眠をタップリとった上で約束の渋谷に向かう。約束の時間よりかなり早い到着となってしまった。別に張り切ったわけではないけれど、一人暮らしの男が家にいても何かすることがあるわけではないからである。流石に待ち合わせ場所に待っているのも、時間の無駄すぎるので近くの本屋に向かう。新刊コーナーに、スティーブン・ジョブス関係の本を見つけ、思わず手に取り読みふけっていると、近くになんか視線を感じる。

星ワンポイントのついたピンで長めの前髪を留めた小柄の女性が、こっちをキョトンと見上げている。月見里さんだけど、こうして真横にいると、俺の胸あたりまでしかない彼女はさらに小さくみえた。

胸に大きなネコのワンポイントのついた細身のTシャツに、踝までのロングタイトスカートという出で立ち。一見シンプルな格好だけど、俺の背丈だと、広く開いた胸元から彼女の胸が（胸があまり大きくないから、あまり深くはないけれど）少し見える。それにそのタイトスカートのスリットが見ようによっては艶めかしい。そのスリットは、たぶん会社でも普通に女性が着ているスカートの丈くらいまでしかないのだけど、隠れていた足がチラッ、チラッと見えるというのはなかなか、男性としてはクルものがある。また月見里さんが、小さい身体のくせに元気に大股で歩く癖がある事がますます、俺にそのチラチラを意識させた。

書店を出て、ランチを食べるお店への道のり、俺は怪しくもチラチラと月見里さんを見ていた。

「どうしたの？　ニヤニヤして」

月見里さんは、首をかしげ不思議そうにコチラを見上げてくる。俺は慌てて真顔に戻す。

「いや、ハンバーガー楽しみで。どうして、今日そのハンバーガーのお店見つけたの？」

キョトンとした目をして、そして笑い出す。

「大陽くんが、こないだメールで、無性にアメリカっぽいハンバーガー食べたいって言ってたじゃない」

たしかに、十日程前に、食べ物の話をするついでに、そんな感じ

の事メールに書いたかもしれない。

「あ、それ覚えてくれていて探してくれたんだ」

そういった気遣いに、チョット感動する。

「一緒に出かけると決まった後に、二つの言葉を検索欄にいれてググっただけどね～」

へへへと悪戯っぽく笑う。月見里さんは、目も鼻も口もこじんまりしていて美人という訳ではないけど、この人の笑顔っていいなと思った。化粧をバッチリして別人かというほど化ける女っているけれど、一番手っ取り早く女が可愛くなるのって、笑うことなんじゃないだろうか？

ハンバーガー屋さんでも、俺がデカすぎるタワーハンバーグを具材を落としまくりながら食べても、眉を顰めもせずに月見里さんは笑って見ていた。逆に今まで付き合っていた彼女って、なんであんなに細かい所で怒りまくったのかと不思議になる。

喧嘩にもならないので、楽しいまま展示会場に向かうことに。

ややマニアックなイベントなせいか、渋谷のわりに人は思ったよりも少ないように感じた。それだけに、展示物はジックリみることができる。

ハンス・ルドルフ・ギーガーがデザインのエイリアンのデザイン画や模型は面白かった。でもソレらを小さい子供が目を輝かせているのを見て、俺は『いいのか？　そんなの子供に見せても』と思う。

隣をみると、子供と同じくらい興味津々という表情で月見里さん

がエイリアンの卵を見ている。

「この映画のすごいところは、こんなビジュアルのクリーチャーを堂々と画面に登場させた所だよね～」

月見里さんは、「ん？」とコチラを見上げる。

「いや、この形状の数々、ボカシ必要な程、変態すぎる形状でしょ」

もしかして、気がついてなかったのか？　彼女は一旦展示物に視線をめぐらせ「はっ」とした表情になり、コチラに視線を戻し困ったようにヘラっと笑う。

「た……確かに……あまりにも堂々と出されて気がつかなかった」

ギーガのデザインしたエイリアンって、よくコレがそのまま通ったと感心するほど、卑猥な形状しまくっているのだ。ほとんどが男女の生殖器そのものという状況。まあ、エイリアンという生物の生態が、繁殖という本能で生きているところがあるから、そこからもあえてこういう形状にしたのかもしれない。

「まあ、アートとしてはソレでいいのだろうけどね～R指定のない映画にはどうかと思うよね」

月見里さんは、再び模型に視線を戻し、しげしげと見つめている。

「エイリアンって、確か普通にTVも放映されているよね」

その言葉に俺は頷く。たしか初めて見たのは小学校の時、TVで放映されたやつだった。そして堂々とボカシもなく卑猥なクリーチ

ャーが大暴れしていた。

「でも、アーチストというのはそこにも美を見いだすものなのかもね～

大陽くんはロバート・メープルソープというカメラマン知っているかな？」

知らなかったので首を横にふる。

「その人は、カメラマンとして今までの常識をことごとく打ち破り、発想・構図の大胆さ素晴らしさから、その後のカメラマンにも大きな影響を与えた人なの」

「そうなんだ」

「でね、その人を評する言葉に。『メープルソープは花を撮るように性器を撮影して、性器を撮るかのように花を撮影した』っていうのがあって、チョットそれを思い出した。

たしかにメープルソープって『いきり立った男性器』をドアップで写した作品があるの。写っているモノも『そのもの』としか言いようのないのだけど、なんか綺麗なのよね」

（それも、アートの範疇なのか？　しかもそんな写真を綺麗って……）

「物事って、何でも突き抜けちゃうと、スゴイってことなんだろうね」

そういって月見里さんはヘラっと笑った。

「確かに、これらも異様だけど面白いもの。生命というものは元々淫靡な要素をもっていてそれが、その艶めかしさがリアルさとか説得力につながるというのもあるかもね」

自分でうっかりふっておきながら、俺は性器という言葉を堂々と使い会話してくる彼女にドギマギしていた。

確か月見里さんはお下劣な内容は嫌いな筈だけど、それがアートという要素が絡むと怒りのツボから外れるという事をここで学んだ。

融解点

映画館の大画面で映画を観る。これは映画の醍醐味ともいえる事だけど、コレには意外と苛立たしい事も多い。

というのは、鑑賞態度が酷い観客が結構多いのだ。映画館で普通にしゃべるヤツ、携帯のバックライトを煌々とさせて何かやっているヤツ、しゃべってなくてもガサガサと音を出しまくるヤツそういうのが近くにいると、どうしようもなくイライラする。

俺は温厚でも気が長い方でもないから、そういうのが隣とかにいると『ウルセエ〜！』とつい怒鳴ってしまうことも多々あったりする。

今日も近くに、そういった客がいる。もう上映始まる前の傍若無人なテンションから悪い予感はしていた。案の定映画が始まっても脊髄反射か？　というくらい映像をみた内容に関する口にしてしゃべり続けている。

「この俳優さんって、何にでてた人だっけ？」

「ああ、ほら、アレ」

イライラする。でも注意しようにも、一人挟んだ向こうにいるために、微妙な距離感によりそれも出来ず苛立ちが募る。

「煩くてスッゴイ迷惑なんですが、黙って観られませんか？」

苛立ちを抑えるために大きくため息をついたときに、隣から低い声がする。その『隣に座っていた』月見里さんが明らかに怒りを露

にした声を、発していた。
　そのしゃべりまくっていた二人は『こわーい』とかいいながらもなんとか、黙ってくれたようだ。

（あ、ココではキレるんだ、月見里さんって）

　隣で、息をフーと一回吐き、そしてスクリーンに視線を戻す月見里さんの様子がなんか可愛くてチョット笑ってしまった。なんか興奮した後に、必死に毛繕いして気を落ち着かせている猫みたいだ。
　俺の笑った気配が気になったのか『何？！』といったチョット睨むような視線をコチラにむけるが、俺は『なんでもない』という感じで首をふりスクリーンに視線を戻し映画に集中することにする。

　月見里さんとは三月に同窓会で知り合い、その一ヵ月後映画に行き、そしてさらに一ヶ月後一緒にでかけ、そして六月の終わり、僕らはまた映画を二人で観ている。三ヶ月で普通に出かけること一回、映画を観る事４回。俺達のこの関係っていったい何なんだろうか？
　と思わないでもない今日この頃。
　同窓会で、一応小学校の時に同じクラスだったことがあったものの、その頃のことはお互い殆ど記憶にない状態だし、今も会社も違うし住んでいる場所も近くもない。つまりメールをどちらかが止めればあっさり切れてしまう関係だと思う。

　でもメールのやり取りはそれなりに楽しいし、こうして会って一日話していても、俺にしては珍しく喧嘩して険悪になるということもないので、なんとなく不思議な関係が続いている。

　映画自体は、映像も派手だし物語のテンポもよく最高に楽しめた。月見里さんも満足したようで、機嫌を取り戻している。
　渋谷の雑踏に揉まれながらもニコニコとしている。彼女は雑踏あ

るくと、良く人にぶつかる。観察していると、彼女くらい小さい人は前からくる人は全然避けてくれないようだ。だから彼女が細かく避けて歩かないとだめなのだ。そうして歩いていても強引に歩いている人とか平気に彼女に体当たりを食らわすように歩いていく。

見てられなくて、雑踏では俺が先に歩き、手をひき後ろからついてきてもらうようにした。ようやく混雑しているところを抜け出し繋いでいた手を離す。俺たちはそのあたりで見かけた韓国料理屋さんに入り遅めのランチを楽しむことにした。

「確かに、大陽くんの言うとおりだね、こういうアクションって、やはり大画面で楽しむべきだね」

ニコニコと笑って喜ぶ人間といると、今みた映画の面白さも何割増しかに感じるようだ。

俺は注文したクッパを吐息で冷ましながら、そんな彼女の言葉を聞いていた。

「だろ？　大画面で見てこそのこの迫力だからね」

俺の言葉に、ウンウンと頷く。

月見里さんは真剣な表情で、石焼ビビンバのご飯を混ぜ、セッセとそれを熱々の釜の内側へと広げ固めていっている。パリパリおコゲな感じが好きならしい。

「脚本は本当に馬鹿だったけどね」

「それが、こういった映画の味わいというべきでしょう」

その言葉にフフっと月見里さんが笑う。

「なんかさ、映画をこうやって単純に頭空っぽにして観るというのもいいものだね」

「映画ってそういうものでしょ、月見里さんが無駄に複雑に観すぎるだけでしょ。結構みかけによらず理屈っぽいよね」

月見里さんの表情が一瞬固まる。しまった、いつもこういう相手を論じて纏める言葉で、いつも女の子を怒らせてしまうのを思い出す。

「まあね、つい頭の中で分析分類して安心するというところがあるから」

多分ムッとしたのだと思うけど、月見里さんはすぐに笑みを作りそういった言葉を返してきた。彼女はすぐに反論を返すのではなく、こうやって一旦相手の言葉を呑んでから気持ちを整理して言葉を返してくる。

流石何回か合って話すようになってから、だんだん月見里さんという人物が見えてきた。

彼女は決して怒ることもしない穏やかな人格者というわけではない。感情が豊かな分、笑うのと同じくらい怒っているのだと思う。でもムッとしても今みたいに、すぐに笑顔で誤魔化す。

最初に映画に行ったときの事も、かなりムカついていたのだなというのを、『この映画だったら、大陽くんも寝る事なさそうだから安心だね～』といった会話してくる事で気が付いた。

逆に言えば、その彼女の絶妙な回避行動が、喧嘩といった事態に陥ることが一切なく良好な関係を続けていられているともいえるのかもしれない。でも、なんかそういう所に、物足りなさを感じてき

ている自分もいた。

「そういうのって、疲れない？」

俺の言葉に、ビビンバのご飯の焼け具合を確認していた月見里さんは顔を上げ、首をかしげて見上げてくる。

「何でもかんでも、細分化して整理するって、もっと単純に喜怒哀楽くらいに大雑把でいいのでは？　で『あ～最高に楽しかった』『スッゴイムカつく』と無邪気に言い放つ、それでいいじゃん」

月見里さんは、イマイチ意味が分らなかったようでポカンとしている。

「俺は単純な人間だから、なんかそういうのって、面倒くさそうだなって思って」

なぜかそこでブッっと月見里さんは笑う。『単純』というところがツボに嵌ったようだ。自覚して、今自分でもそう言ったのに、笑われるとチョットムカつく。

「大陽くんみたいに、直球で喜怒哀楽出せたら、素敵なんだろうね」

そういって、小さく溜息をつく。

「でも、コレが私だけだね～ややこしくて、面倒なのが！」

そして、おどけたように、そんな事を言ってくる。

「なんだ、自覚しているんだ、そういう人間なんだって」

どうも余計な事をすぐ言ってしまうのが俺というヤツ。俺の言葉に大げさに眉を寄せ、大きくため息をつく。さっきとは違って、怒っているわけではなく、ズケズケ言ってしまった俺に呆れているといった感じなのだろう。

「まあね～！　こんな自分と二十年以上付き合っているから」

「なるほど」

俺は、クッパに入っていた大きい肉をスプーンですくって口にいれた。肉が柔らかくて結構旨い。

「でもさ、そういう大陽くんも、気が短すぎだよね、すぐ怒る。列割り込んできたおばさん、ぶつかっても謝りもしないおじさんとか、すぐ怒鳴ってしまうんだもの」

それって、相手が全て悪いし、怒られて当然だと思うけど。そんな場面に居合わせた彼女はいつも驚いた顔をする。

『もう少し紳士的な言い方できないかな？　あんな言い方だと威圧でしかないよ。大陽くんただでさえデカくて怖いんだから』

と月見里さんはよく言う。でもムカついた瞬間に言葉が出てしまっているから仕方が無い。それにぶつけられても、失礼な事されても、それをニコニコと笑って流す彼女の方が信じられない。

「でも、あれは言い方がともかく悪い事ではないだろ？」

『ん～』と月見里さんは困った顔をする。

「なんかさ、ゴチャゴチャ考える私と、直球過ぎる大陽くん、混ぜたら良い感じなのかもね～チョットは大陽くんっぽさを学ぶ事にします」

月見里さんは、そう言いながら茶碗にビビンバをよそって入れて、俺にそっと差し出す。旨そうにカリっとしたご飯がそこで湯気をあげていた。あんなに大事に育てていたビビンバをくれるんだ！

「なかなか、よい感じに出来たから、お裾わけ」

彼女はそういいながらスプーンで、石釜から直接ビビンバを食べている。

「ありがとう！　あっクッパもいる？」

こっちは手をつけてしまったけど大丈夫だったのかなとも思ったけれど、月見里さんは顔を上げた彼女がニカっと笑う。

「欲しい～！」

俺はカリッカリの美味しいビビンバを先に平らげ、その器に自分のクッパをよそい、さらに旨かった肉を上にのせ彼女に渡した。

月見里さんが、手を加えて一生懸命仕上げたビビンバは確かにカリッカリで旨かった。

「このクッパの肉、柔らかくて美味しいね～」

幸せそうに、前で月見里さんが満面の笑みを浮かべている。

「だろ？」

なんだろうか、料理の味がというか、この空間自体がなんか楽しくて、俺も笑っていた。

全然、性格も考え方も違った二人だけに、気付く事も多く考えさせられる。単細胞の俺とややこしい彼女、こうして同じ釜の飯食べて、思い出を重ねる内に、二人はどんな変化していくのだろうか？

俺の怒りっぽい性格も、少しは我慢を覚えるのだろうか？　なんて事もチラリと考えたが、ゴチャゴチャ考えるのも面倒なので、今のこの時間を楽しむ事にした。

論点

『男と女の間に友情はありえるか？』

みんな気まますぎるせいか、あまり飲み会というものが俺の職場にはない。今日は珍しく別の事業所の同期の友達が来ている事で飲みにいくことになった。

お酒を飲むと、人はどうしてこうも語りあいをしたがるものなのだろうか？

メンバーの一人が、半年間片思いをしていた女性に告白し『友達としてしか見られない』と言われて振られたという話からそんな話題となった。

意外にも、女性二人は『ある』と答え、男性メンバーは『ない』という意見が大半だった。

「大陽くんはどうなのよ？」

ぼんやりとみんなの話を聞いていた俺は、正面に座っていた沢村先輩にイキナリ話を振られて悩む。

「あるんじゃない？　現に先輩と俺も男と女だけど、いわゆる下心はいっさい感じることないですから、友情関係ですよね？」

「うーん、私ら友達だったんだ、知らなかった」

沢村先輩はそういってカラカラ笑ってビールをあおった。ウチの職場にいる女性って、この方だけでなく皆、化粧っ気もなくどこか女らしさにかける人が多い。不規則で激務なＳＥという仕事をこな

す内にそうなってしまうものなのだろうか？

「付き合うって事は、絶対ないから、知人か友達の二択ですよね？」

俺の言葉に、周りの男性も納得したように頷く。恋愛対象になりえない相手とは、下心も抱きようがないというのを実感したのだろう。

いくら、内勤仕事で出会いがないとはいえ、職場恋愛というのはキツイものがある。二年間に一組いたけど周りも気を使うし良い事はまったくない。

「でもさ、もしその友達に彼女とかできても、普通に二人っきりで出かけたりとかできるものなのかな？」

同僚の高橋がそんな事いってくる。

「それは、あまりやっちゃいけないでしょう、二人っきりというのは、彼女が良い気はしないだろうから」

沢村先輩はそう言って、もう一人の女性メンバーの佐野さんと頷きあう。

「そんな事で崩れるということは、友情じゃないってことでは？」

高橋はなぜか自慢げにそう言い放つ。

どうでも良い事で盛り上がる飲み会の会話をぼんやり聞きながら、俺はふと月見里さんの事を頭に思い浮かべる。

気が付けば、細かくメールのやりとりをして、二人とも暇な休日

はどこかでかける。コレって単なる友達にしては密すぎないか？
そもそも恋愛と友情って何が違うのか？　身体の関係があるかないかの違い？
じゃあ、俺と月見里さんがそういう関係になることはありえるのか、ありえないのか？

なくは、ないかも――多分そういう良い感じの雰囲気になったら、躊躇うことなくシテしまうでしょう。月見里さんは色っぽくはないけれど、カワイイといったらカワイイ方だし。

そしてもう一つの可能性も、考える。俺か月見里さんのどちらかに恋人が出来たら、この関係は終わってしまうのか？　ていうか今彼女は彼氏とかいるのだろうか？　どう考えてもいないだろう。彼氏がいる女性にしては、休日が自由すぎる。

※　※　※

あまり悩み続けるのは性に合わない。でもなんとももや～とした気持ちを抱えて週末を迎えた。
今日もまた月見里さんと一緒に映画を観ている。

「いや～ミッキー・ロック系の男性を、格好良いと思えるようになったということは、私も成長したのか、年とってきたというのか」

アメリカンコミック原作の豪華キャストで映像もかなり面白い作品を観終わった後、彼女は眉を寄せてそんな事をつぶやく。気になっていた事を聞いてみることにした。

「そういえば、月見里さんのタイプってどんな感じなの？　ジョニデとか好きだよね？」

直球だといわれる俺も、流石に唐突にストレートに話を聞くなんて事はしない。

「顔だけでいうと、最近はチャン・グンソクとかも好きだよ！　あとキリアン・マーフィーとかの綺麗さも好きだし～」

なかりのイケメン好きなようだ。しかもソフトで女性的なタイプが……。

「まさか、今まで付き合ってきた人も、そういったタイプなんて言わないよな」

月身里さんは、吹き出し首を横にふる。

「いやいや、そんな事あるわけないじゃない。普通の人だったよ～でも優しくて笑顔が素敵で大好きだったの」

目を細めて懐かしそうでいて嬉しそうに彼氏を語る月見里さん。しかし『だった』と二度も過去形で語られるということは、やはり今彼氏はいないようだ。

「笑顔が素敵って……。よく使われるワードだけど、女性にとって男性の重要度ってソコじゃないよね」

月見里さんは俺の言葉に「ん？」という顔をして首をかしげコチラを見る。

「確かにね、要は中身ということかな？」

そしてニカっと脳天気に見える笑顔を見せた。

（中身か、俺はガタイがいいだけに、身は詰まっているけれどそう意味ではないだろう）

「大陽くんは、見た目から入る方？」

その言葉に、『ウーン』と悩む。

「なんか、友達の紹介という感じが多いから」

月見里さんはビックリしたような顔をする。

「そうなんだ。恋人いないとすごく友達紹介してくる人っているよね……」

月見里さんは眉をよせていい、そして大きくため息をつく

そう、俺の友達がそういうヤツがいる。恋愛至上主義で、恋愛していないと人生が面白くないと思っている。そして俺に彼女がいないと気づくと、それはイケナイと、自分の彼女の友達とか知り合いを紹介してくるのだ。まあそれは親切心で紹介してくるし、まあ綺麗な人も多かったので、嫌でもないから付き合ってきた。

「何かあったの？」

「最初みんなで飲みに行って、次もそうかと思って誘われていったら二人だけで……認識のズレというのかな？　私にとっては知人だったのだけど、相手の認識だともう彼女だったらしくて盛り上がっ

ていて大変だったの」

彼女の話を聞くと、相手は話が微妙に通じなく強引な男だったようだ。何も知らない人とつきあえないといと伝えても、『付き合っているうちにわかり合えるから問題ない』と言われ、あくまでも付き合う事を前提にした言葉の数々に、関係をリセットするのにかなりの労力を必要としたようだ。結局紹介してくれた友達に間に入ってもらい、なんとか事態を収拾したようだ。

よほど、相手は彼女が欲しくてたまらないヤツだったのだろう。で、もう紹介された段階で盛り上がって突っ走った。ホラー映画みてもびびりまくる所のある月見里さんは意外と気の弱い。それにも、かなり退いたのだろう。

「イタイ男だな、それ」

月見里さんは困ったように笑う。

「ま、今となっては良い笑い話だね」

過去の恋愛関係の話なんて、そういうものなのだろう。思い出となったら、ある意味笑い話にして流すしかない所がある。

「でも、逆に月見里さんは、好きになった人にガンガンとアプローチとかはしないの？」

月見里さんは首を横にブルブルとふる。

「無理！　ある日突然、恋している自分に気がついて、一人で悶々してしまう方」

「悶々ね～やらし～」

ニヤニヤ笑いの俺を、キッっとにらんでくる。

「そういう意味じゃないって。男性ってすぐに、ソッチに話もっていくから」

しまった、ソッチ方面への話は駄目だった。おかしい、映画の感想でエロな話題を言うときは大丈夫なのに、普通の会話内にはいるとプンプン怒り出す。といっても、話題が変わったら機嫌をすぐ直すレベルの怒りなので、そこまで深刻な状況でもないので、俺はその反応を寧ろ楽しんでしまう。

「はいはい、男なんで。……で、今そんな感じで誰かに悶々していたりするの？」

大げさな感じで、大きくため息をつく。こうして大げさに演技っぽい仕草をしているという事からも、月見里さんがマジに怒っているのはないのが分かる。

「それが、まったくいないのが問題なのよね～彼氏はともかく好きな人くらいは欲しいよね」

「別にいいんじゃない？　恋愛って義務じゃないから」

『それもそうだね』と月見里さんはもっともらしく頷く。

男と女の友情？

それってあるでしょう、現に此所に。

変な探り合いもなく、いい意味で気を遣わなくて気ままに無邪気に楽しめる自然な関係。
たとえ、それはどちらかに恋人が出来たら終わってしまう関係であったとしても、今のこの二人は良い感じの友情で結ばれている。
どういう形で終わってしまうにしても、この時の二人は最高の友達であることは、誰も否定できないと思う。

今俺には恋人も好きな人もいない。月見里さんも同じということは、もうしばらくこの気ままな関係を続けられる事ができそうだ。
その事にホッとしていた。

分岐点

月見里さんとの約束は、今までは何となく意識することもなく決まっていた。その前の週一緒に出掛けた時の会話で、じゃあ来週、用事があるなら次の週でという感じ。土曜日駄目なら次の日とはならず出かけるのは土曜日のみで、日曜日は互いに気ままな休日を過ごすという暗黙のルールがいつのまにか出来ている。

今週は月見里さんが友達と演劇を観に行くという事で一人の休日を過ごす。そこで俺は渋谷で月見里さんが苦手そうなスプラッターホラー映画を観て、本屋だけ寄ってマンションに帰り、簡単なコンビニ弁当での夕食を食べる。次の日は洗濯して簡単な掃除をして、録り溜めしてあったテレビ番組を観ては消しハードディスクを整理してそれなりに充実した週末を過ごした。つまりは、俺にとってはありきたりの休日を過ごしたのに、なんだろうかスッキリしないというかスカッとしない週末を終え月曜日となる。

何か事件が起こるわけでもなく普通に一週間が始まる。会社に行き仲間と文句をいいつつも仕事に勤しむ。いつもの一週間が始まる。

一日の終わりに携帯をチェックすると、土曜日に観た映画の感想を書いたメールの返事が月見里さんから返ってきていた。

『なるほど～怖いというか、かなり痛そうな内容なのですね…。――――

そうそう、観に行った舞台最高でしたよ！

ライブならではの臨場感もあり、ビンビンに熱気が舞台から伝わってきました。

まだ、興奮が残っていて、ハイテンションのまま、月曜日に突入しています』

最高に盛り上がった週末を過ごしたらしい、テンションの高い月見里さんのメールに、何故かこちらのテンションが下がる。
なんか面白くない。

『舞台ってあまり観たことないけれど、面白そうだね。
ただ、何というかアノ、ミュージカルのノリってついて行けないんだよね。なんか不思議すぎて』

なんともモヤモヤしたまま、俺は次の日にそんな返事を書き始める。
そういえば、次に会う約束をまったくしてなかった事を思い出す。

『そういえば、今週末、何か観に行く？』

二日おいた木曜日にメールが返ってくる。

『ミュージカルのあのノリがいいのが、大陽くんには分かりませんか〜
今度、ヘドウィックかＲＥＮＴの映画のＤＶＤ貸しますから、コレなら大陽くんも楽しめると思いますよ――
今週末ですが先輩からテニス部の合宿に誘われて行くことになりました――』

しかしこの暑い夏に、何故テニス部の合宿をするのだろうと思わないでもないが、なかなか月見里さんも忙しいらしい。
週末また一人で映画でも見に行くかと、今週末公開の映画リストをネットで調べる。凄く観たい映画が今週末公開になるので、ソレを観たい所だけど、コレなら月見里さんも楽しめるタイプなので次週にとっておいて、もう少しマニアックな方の映画を観ることにす

る。

再び一人の週末を過ごす。映画はマニアにはニヤリとする部分も多く楽しめた。なんかお中元で大量に何かが届いたからソレを取りに来いと実家に呼ばれたついでに、お袋の味を楽しみ、親の愚痴を聞いてあげて、妹と口論しと、ある意味賑やかな週末を終える。

『日焼け止め塗ったのに、肌がヒリヒリします。そろそろお肌を苛める事は止めた方が良いですね～
合宿は楽しかったですよ！　部員じゃないのにダブルスのトーナメント大会で優勝し、賞品だけチャッカリ貰って申し訳ないです』

月曜日、俺よりも、遥かに充実した休日を過ごしたらしい、月見里さんのメールが届き、良く分からない敗北感を味わう。

『天気良かったからね～暑かっただろうね！
でも、優勝なんて凄いじゃん！　月見里さんがテニス上手なんてチョット意外――』

敗北感はあえて気がつかなかった事にして、返事を出す。

「――小学校の時、父の会社の子供テニススクール通っていたので、嗜む程度には出来ますよ！
あとウチの会社のテニス部が年齢高い人もいるし、どちらかというと長閑にテニスを楽しんでいる人ばかりなので、ボールを普通に打ち返し続ければ相手が自滅するんですよ。
しかもダブルス組んだ人が社内の野球部のキャプテンもやっているくらい運動神経の良い人だったので、それも大きかったのかも」

戻って来たメールに、何かイラ～とする。

スポーツマンタイプの男性と月見里さんが楽しげにハイタッチなどしてテニスを楽しみ、勝利を讃えあっている姿を想像すると、何か面白くない。

テニスの話はもういいやと、今週末映画に誘うメールを出す事にする。観る映画は勿論、先週我慢した派手にヒーローが大暴れするハリウッド映画。

「あ、ゴメンなさい。

実は昨日友達と飲んでいて、その映画の話で盛り上がり、今週末観に行く約束してしまったの――」

しかしさらに面白くない返事が帰ってくる。三週連続、一人の週末決定である。演劇や、テニスは兎も角、映画鑑賞イベントを、他のヤツに取られたのがショックである。しかも約束した訳ではないけど一緒に観ようかと思っていた映画を、他のヤツと観に行ってしまわれると、なんか裏切られた気になる。

（ん、ヤツ？　男って事はないよね）

根拠はないがそう思うものの、なんか不安になってくる。月見里さんの最近のメールを読み返してみる。最初に演劇観に行ったのは、同じ職場の同期の友達で、その演劇の内容と月見里さんがその日過ごしたコースというのも相手は女の子としか考えられない。そして次のテニス合宿に誘ったという職場の先輩も、『尊敬するお姉様に誘われたら行かないわけにいかない』という文章があることからコチラも女性であることは確定している。でも、今週末の相手は、高校時代の友達とだけの表記、しかもこういった派手なハリウッドアクション映画で盛り上がるって……。

『ほうほう、もしかしてデートですかい？』

姑息だと思うけど、顔文字混じりで冷やかした感じのメールをすぐ返してしまう。

『はい！　デートです♪　　でも相手女の子ですけどね～』

ニヤリとした顔文字のついた、この微妙な言い回しをしてくる月見里さんのメールを苦笑してしまう。でも読みつつ、内心ホッとしていた。何で俺は喜んでいるんだ?！

隣の席で、雑誌を読んでいる高橋が目に入る。花火大会を特集した週刊誌を読んでいるようだ。煙草を吸わない俺や高橋はこうして席で一息いれるしかない。煙草を吸っているヤツは喫煙室で煙草吸っているだけで『ああ、一息いれているんだな』と思われるけれど、吸わない俺たちはこのように席で一息いれるしかなく、こうして気ままに過ごしている様子はサボっているように見えるのが困った所である。

「何か楽しい情報あるの?」

俺は高橋の読んでいる雑誌をのぞき込む。

「いや、花火大会行こうと思って、スケジュールを調べていた所、こういった雑誌は情報纏まっていてネットで調べるよりてっとり早いしね」

高橋は、雑誌を見ながらメールをピコピコと携帯を操作している。

「なに、デート?」

からかうように言うと、高橋は顔を思いっきり嫌そうにしかめる。コイツはここ半年、彼女を欲しいと叫びまくっている。出来たら出来たで、デート先をイソイソ選んでいたりと分かり易い行動するので、まだそんな相手が出来ていないというのも、なんとなく察していた。

「いや、大学時代のサークル仲間で、花火観ながらビール飲んで騒いでという感じ」

「なるほどね～ソレは、ソレで楽しそうだな」

そう言いながら、高橋がみているページにある関東近郊の花火大会のスケジュールを見る。来週の週末、多摩川で花火大会が行われるのを見つける。

『来週末多摩川で花火大会があるらしいよ！　良かったら一緒に観に行かない？』

俺は携帯を取り出し、即そんなメールを月見里さんに出していた。そして仕事に戻ることにする。

今日は、先方からチャチャも入らず、集中して仕事もでき、気がつけば日も落ち八時すぎていた。

そろそろ、作業の切りもよいし、今日の作業はここまでにすることにする。同じ体制でいたことで強ばっていた身体をノビしてほぐす。なんか背中かピキっと怪しい音がした。

机の上の携帯がメールの着信を伝えている。見ると、様々なメールに紛れて月見里さんからも来ているようだ。

『花火大会！！　いいですね～！』

承諾の内容のメールに、疲れがチョット吹っ飛び、何故かニヤニヤしていた。

来週は久しぶりに楽しい週末が過ごせそうだ。晴れるといいな、遠足前の子供みたいな事を素直に考えていた。

臨界点

夏の太陽は容赦ない。その光は肌にまさに突き刺さるそんなパワーをもって襲いかかる。そんな夏の炎天下、俺は河原にレジャーシートを広げる。

月見里さんと手分けして、四隅をシート用の杭をうち地面に固定していく。

普通にアスファルトの上を歩くよりかは、川の流れと風が若干気温を下げるものの、心地良いというレベルにはほど遠く、灼熱地獄であることは変わりない状態である。

何故そんな環境に関わらず、河原にレジャーシートを広げるのかというと、今日はこの河原で花火大会が開催されるからである。

早くも屋台等の準備もすすめられ、お祭りムードが早くも漂っている。

俺は百均一で買ったブルーのレジャーシートに『大』の字をガムテープで記して領有権を主張しておく。しかし、『コレだけで陣地主張になるの？』と月見里さんが心配するので、隣に『月』という文字も入れておいた。流石に『陽』の字をガムテープで表現するのは面倒だったので。

気がつけば会うのも一月ぶりになった、月見里さんはチョッピリ日焼けしていて、ますます元気そうに見えた。

花火大会だけど、月見里さんは浴衣ってこともなくエスニックな大胆な花柄のワンピースにツバの広めな帽子をかぶり。いわゆるリゾートファッションというのだろうか？　三月に初めてあったときは短かった髪も、短めのボブというのかな？　少し女性らしい雰囲気を出している。女の子って髪型と服装で本当に雰囲気が変わる。

パンツルックだと元気キャラに見えるのに、こういう格好すると少しお淑やかに見えるから不思議である。脳天気なようで神経質、大らかなようでシビア、大雑把なようで意外と細かい所もあるといった感じで多様な面をもつ。だからだろうか、カジュアルでいながらパンツルックからシックな感じと様々格好をしてきているけれど、どんな格好していても月見里さんらしいと思える。

陣地を確保したことで、一旦二人でシートに落ち着く。

月見里さんはバックから日焼け留めクリームを出しセッセと腕に塗っている。流石に二十代半ばとなるとお肌の曲がり角ということで紫外線が怖いらしい。スラリと細い腕が、太陽の下だとなんとも眩しい。先々週、日に焼けてしまったと嘆いていたけれど、言うほど真っ黒になったわけでもなく、寧ろ夏ならコレくらいの色の方が健康的で自然では？　とも思う。けれど、彼女曰く、『これくらい大丈夫かな？　と油断して過ごすと真っ黒になってしまうから、気が付いたときにケアはしておいたほうが良い』らしい。

作業している自分をニヤニヤしてみている俺の視線が気になったのか、月見里さんが顔を上げる。

「大陽くんもつけた方がいいよ！　ドカタ焼けは恥ずかしいよ～」

「めんどくさいからいいよ」

そういう俺に、ニヤリと笑い、手に、日焼け止めをたらし俺の腕にビシャっと触る。

「つけちゃった！」

「うわっ　ベタベタじゃないか」

「お肌の曲がり角なんだからケアしなきゃ！」

文句言う俺の腕についたクリームを笑いながらのばしてくれる彼女。月見里さんの指が俺の腕をすべる感触がなんともくすぐったいというか、何というか……。

周りにいるイチャイチャしているカップルの男性と同じような締まりのない顔を自分がしているのもウッスラ認識にしている。

暑いというか、なんか熱い。

「あのさ、場所もとったし、クーラー効いたところに避難しない？」

月見里さんは、ニッカリ笑って頷く。

仮設トイレも多く用意された状況だとはいえ、今はまだ昼チョット過ぎ。こんな時間からここで待機するのもハッキリいって馬鹿である。

二人で連れ立って二子橋を渡り、高島屋へ逃げ込む。流石デパートだけあって、冷房が心地よく効いた空間が熱さで半分溶けかかっていた身体を引き締める。

「なんか、生き返るね～！　この上で何か食べる？」

月見里さんは帽子を脱ぎながら晴れやかに笑う。

二人でのんびりとエスカレーターで上の階に上がっていく。先にエスカレーターに乗っているために、珍しく視線が合い意外に話しやすいことを発見する。

「たしか上って、人気の食べ放題のお店と、あとカレーうどんのお店とかあったよね」

「ほうほう、どちらも捨てがたい。月見里さんはどちらが良い？」

ウーンと唇を横にキュッとひっぱるようにひき、真剣な顔で悩んでいる様子の月見里さんの様子が、なんか子供っぽくて面白い。いつもよりも顔が近いせいか表情がよく見える。それにさっきまで俺の視線からだと、帽子の所為でよく月見里さんの顔が見えなかったせいもあるのかも。俺はしげしげとクルクル表情をかえる彼女の顔を見つめていた。

「柿安は、結構店舗によってメニューとかも違うから行ってみたいけれど、このあと色々屋台で食べること考えると、食べ放題は止めといたほうがいいのかな」

たしかに、花火大会の会場でズラッと並んだ屋台は面白そうだった。先程はまだ開店準備中だったので冷やかせなかったけれど、粉モノ好きな俺としてはかなりそそるものが多かった。

「たしかに、お昼は控えめにしておいたほうがいいかもな」

「大陽くんは無敵な鉄の胃袋（アイアンストマック）持っているからいいけどね～」

からかうように、月見里さんが俺のお腹をノックするようにポンポン叩く。最近少し出てきたかもしれない。俺は恥ずかしくなって彼女の悪戯な拳をそのまま掌で包むように掴んで捕獲する。

「人のお腹を、気安く触るもんじゃありません」

小さい子を叱るような口調で言う俺を、クスクスと笑いながら見返す。そして俺の手ごと動かし、再びお腹をポンポン攻撃しようとしてくるので、俺はますます力を込めてその手を抑える。

エスカレーターの降り口で、その攻防は終わるものの、結局手はそのままレストラン街へと上っていってしまった。月見里さんは小

っこいので、手も小さい、俺の拳の中にスッポリ入ってしまうほど。
月見里さんも、その手のサイズの違いが可笑しいのかソチラにチラリと視線をしてニヤニヤする。
「あのさ、大陽くんと私が、人間図鑑に掲載されるとしたら、絶対異なる品種の人間として違うページで紹介されるよね！」
その言葉に笑ってしまう。
「かもね、月見里さんは、ホモ・サピエンス種チンチクリン亜種とか？」
ムッとした顔をしてジトっと睨んでくる。最近は素直に、こういった怒りの表情をハッキリ表現してくれるようになった気がする。
「なら、大陽くんは、ビックフット属ホモ・サピエンス種巨人亜種？」
しかし、言い返してくる言葉はなんとも惚けているから、喧嘩にもならず単なる漫才なやりとりになる。
「いやいや、属からそうなると、もはや俺人間扱いになってないから！」
俺の苦笑に、彼女は満足したように笑う。
「勝った！」
よく分からない判定で、俺は何かの勝負に負けたらしい。

今日は映画を観に来たわけでもないので、会話はそれぞれの日常とか興味のあることとか、何でもない普通の内容が多い。でもそんな話題でも彼女は楽しそうに聞いてくれて、俺も彼女の話を楽しんだ。会話が弾むというのは趣味思考の一致とかではないらしい。要は聞く姿勢と、相手への興味というのだろうか？

俺たちは太陽がもう少し傾くまでの時間、デパートの中でノンビリとウィンドウショッピングをしながら涼しい時間を満喫していた。

引火点

三時半すぎくらいにデパ地下で買った飲み物や食べ物をもって河原に戻る事にした。

少し曇り日差しが弱まったことで、先程よりもかなり楽になっていた。そこでデパ地下で買ったお総菜や、屋台で買ったものを並べチョットしたピクニックのような時間を楽しむ。

「コレ、最高だよ！　大陽くんも、ほら食べて！」

月見里さんは、台湾風かき氷が気に入ったとかで、二杯目となるかき氷を満面の笑みで食べて、コチラにそのカップを差し出す。

彼女からお裾分けされたかき氷は確かに上手かった。練乳入りの氷を特殊なかき氷機で作ったという雪のように粒子の細かい氷は、口に入れた瞬間にふわりと溶ける。『よくそんなに食べるな～』といいつつ、結局その半分をシッカリ俺も食べているので、実質一人一杯だったの丁度良いのかもしれない。

オーソドックスな『たこ焼き』とか『お好み焼き』とか粉物を買ってくる俺と違い、彼女はこういった珍しい食べ物を選ぶ。今日も〇〇名物といった屋台としては珍しいの料理を選んで買ってきていた。

二人で、レジャーシートの上でまったりした時間過ごす。あとは派手に花火が打ち上がるのを見て盛り上がり、最高の一日になること間違いないだろう。久しぶりに充実した週末だ。

月見里さんも、今という時間の楽しさと、夜に見る花火への期待で顔を輝かせている。俺を今一番ワクワクさせているのって、食べ物でも花火への期待でもなく、月見里さんの笑顔なのかもしれない。今の彩度も明度もマックスに見える笑顔を見ていると、出会った当

時の笑みって明らかに誤魔化し笑いに近いものがあったんだなと気付く。あの時は、怒りも呆れもすべて笑顔で返してきたので、月見里さんという人間がわかり辛かったし、誤解していた面もあったけど、最近の月見里さんはなんか分かりやすい。時折みせるむくれ顔が、嬉しいというのも不思議だけど。女の子のむくれ顔なんて、うっとうしいだけなのに、月見里さんの場合、様々な表情をみれるのが嬉しい。

お腹も一杯になった。暗くなる前に食べ物のゴミを纏めることにする。花火が始まったら食べ物どころではないし、暗い中食べるのも事故が多そうなので、明るいうちにゴミはかたづけておいたほうがいいからだ。スッキリさせたレジャーシートに、俺はペット飲料を手に寝転び空を見上げる。

「食べてすぐ寝ると、牛になるよ」

月見里さんはそんな俺を見て笑う。そう俺に言いながら、彼女も隣に寝転んでくる。

「なんかチョット厚めの雲出てきたね」

同じように空を見上げて、そうつぶやく。たしかに、先程より重たそうな雲が立ちこめてきている。

「だね、でも花火には支障ないでしょ」

「うん、だね！」

少しずつ暗くなっていく空を見上げて、二人でポツリポツリと会話する。視界が悪くなっていく事もあるのか、周りにはいっぱい人

がいるはずなのに、ココに二人だけのスローなテンポの世界が出来ている。

「なんかさ、空を見上げるって気持ちいい」

月見里さんが、つぶやく。

「そうだね」

雲が立ちこめた空なんて、見ていてもそう面白いものではないはずだけど素直に同意の言葉を返していた。

「なんか、宇宙を感じて、すべての事が小さい事のように思える」

ずいぶん、大きく話をもってきたものだ。俺はフッと吹き出す。

「星空みてそう思うならともかく、このどんよりした雲みて思うか？」

隣で『ウーン』何やら考えている声がする。

「想像力あるもので、空を見たら宇宙を感じるの！　昼間でも太陽の向こうに星を感じるし、今もこの雲のはるか向こうに満点の星が輝いているって思うんだよね」

「それはスゴイな」

隣を見ると、月見里さんはまじめな顔をして静かに空を見上げている。雲の向こうの風景までを見通すように真っ直ぐと空を見つめている。その瞳が憂いのある感じで、月見里さんがすごく女っぽく

見えドキっとする。小柄で笑い方が子供っぽいからつい幼く見えがちだけど、真剣な表情をしていると大人っぽくというか年相応な顔になるみたいだ。
無意識に手をそっと彼女の手の方に移動させる。別にやらしい意味ではなくなんか月見里さんを感じたかった。
もう少しで彼女の手に触るというタイミングで俺の手になんかポタっと液体が垂れてきた。

「えっ！」

慌てて起き上がると、手だけでなくポタッ、ポタッとそこら中に何か水滴を感じる。

「え、嘘！　雨？」

月見里さんも慌てて起き上がる。信じられない事にあと五分弱というタイミングで雨が降ってきたようだ。
月見里さんが鞄から出した折り畳傘に二人で入り、しばらくその場で様子を伺うけれど、雨足は止む所かどんどん激しくなってくる。しまいにはプールの底が抜けたような状態だ。

「コレって、もう無理だよね」

月見里さんも頷き二人で立ち上がり、レジ袋にレジャーシートを雑にしまいその場を離れることにした。
一斉に皆が駅方面に動き出したことで、会場は一気に慌ただしくなる。

歩道しか通れる場所がなく一気に狭まった高架下まで来たときに、いきなり後ろで花火が打ち上がる。

信じられない事に、こんな土砂降りの雨の中でも花火大会を強行決行したらしい。というか花火の設置などの関係でもう、延期という事も出来ない状態まできていたんだろう。

花火が打ち上がる事で、見物客の動きは益々混乱した。雨で駅に向かおうとする人、花火が上がったことで会場に戻ろうとする人。無作為に移動する人で、俺たちは人がミッシリいる空間で身動きがとれなくなる。しかもその状態でも無理矢理でも行きたい方向に進もうとする人もいて、それだけの人数が押しくらまんじゅうしている状況となる。小柄の月見里さんなんて完全に人混みに埋もれていて、もみくちゃにされ呻き声まであげている。しかもさっきまで横にいたはずの月見里さんが少しずつ離れていく。

この時、月見里さんはものすごく小っちゃく脆い存在に感じた。俺がココでシッカリと守らないと壊れてしまう。

俺は手を伸ばし、月見里さんをたぐりよせ、はぐれないように抱きしめる。なんとか彼女を守って、この混雑した空間から離れないと危険だ。

月見里さんを抱きしめたまま周りを伺う。二子玉側方面に向かう多摩川の上の二子橋は人がいっぱいで同じように混乱しているのを確認する。川の向こうへ行くにはその橋しかないから当然だろう。となると反対側の溝の口方面に抜けたほうがいいかもしれない。ソチラなら抜け道も多く、この混雑は避けられる。

「つかまっててて」

そう月見里さんに声をかけ、あまり強引にならないようにゆっくりと移動していく。力強く抱きしめてないと、人混みに月見里さんは持って行かれそうになる。彼女もはぐれるのが怖いのか、俺に必死にしがみつくように一緒に移動していく。後ろで場違いに花火が打ち上がる景気のよい音がしている。

なんとか高架下をなんとか抜け信号を渡り、寿司詰め状態からは脱する事はできたものの、まだまだ混乱した人が右往左往している。俺はそのまま右手で傘を持ち左で月見里さんの肩を抱き寄せ住宅街の方へと進む。大通りはこのあたりに詳しくない人が退去しているために混雑していたから。

地元民くらいしか通らない道なんだろう、人もまばらな道に出れて混雑から完全に離脱できた。そして閉店した後のクリーニングやの軒下でよくやく俺はホッと一息つき月見里さんの肩から手を下ろす。

隣をみると髪の毛もボッサボサになり、人混みと激しい雨で傘が殆ど役になってなかったようで、左半分とスカートがびしょ濡れになっている、見るからにボロボロという状態である。帽子が無くなっているのも気が付いたけど、今となっては見つけるのは不可能だろう。

チョット離れた空間で、花火は相変わらず打ち上がっている。俺たちはぼんやりとソチラをしばらく眺めていた。

隣で大きく息を吐く音がする。隣をみると手串で髪の毛を整えている月見里さんが見える。自分が誘っただけに散々な花火見物になった事に申しわけない気持ちになる。

ふと俺の視線を感じたのか、月見里さんはこっちを見上げる。そしてクスクスと何故か笑い出す。何故か俺も笑えてきた。

「スゴイ、絶妙なタイミングで雨降ってきたよね」

月見里さんは可笑しそうに肩をふるわせそんな事を言ってくる。

「本当に、しかも振り方もコントみたいだった」

「いや～今時の花火ってスゴイね、こんな雨もろともしないなんて。綺麗」

「本当に」

二人で笑いながら、花火打ち上げ会場の方に視線をやる。こんな土砂降りの中なのに、綺麗に花火が打ち上がっている。

最悪なイベントだったのに、何故だろうか月見里さんとだったら、それが笑えて、こうして楽しめる。

散々な目にあったのに、二人でいれば、『まあ、いいか』と笑ってしまう。

隣をそっとみると、濡れ鼠の状態なのにニコニコと花火を眺めている月見里さんがいる。ドキドキといった気持ちでなくなんか満たされた気持ちになってくる。俺はこの女性が好きなのだという事に改めて気が付く。友達としてもあるし、それ以上の存在としても。

土砂降りの雨の中、花火は無事発火でき、俺の心の中でも怒りとは別のモノが発火した。

「あのさ……」

俺はそこで一旦言葉を切り、深呼吸する。

「月見里さんとだったら、どんな事も楽しく乗り越えていけそうだよね」

コチラを見上げてきた月見里さんは、その言葉にクスクスと笑い頷く。

「コレからもずっと、二人で色々思い出つくっていこう！　こうや

って笑いながら」

俺は内心ドキドキしながら、そう彼女に告白をした。こんなにマジモードで人にクサイ言葉で告白したのって初めてかもしれない。

月見里さんはその言葉にチョット驚いたように眼を大きく広げたけれど、すぐに満面の笑顔になる。その表情を花火がさらに明るく照らす。

「いいね！　二人でもっともっと、いろんな所行って楽しもう！」

月見里さんらしい感じの、承諾の言葉が返ってきた。

「とりあえず、この先にたしかユニクロあるからそこで、月見里さんの着替え買いに行こう！　店が閉まる前に」

「大陽くんは？」

「俺はマンション近いから、月見里さんもウチで着替えるといいよ」

俺達は再び一つの傘で、肩を組みながら、土砂降りの街の中へと再び飛び込むことにした。二人の後ろで打ち上げ花火が景気よくあがっている。

さっきはあれ程むかついた音だったけれど、今はなんか目出度く聞こえる。

恋愛のスタートを祝って花火が打ち上がる。ある意味、映画かドラマのようなシーンではないか。二人の恋愛はそれがラブロマンスではなく、ラブコメディーかもしれないけれど、彼女と作る時間ならそれでも良い。いや寧ろその方が楽しくて良い。そうだよね？

そんな事考えながら、三十五センチ下を見ると月見里さんはニッカリと明るい笑顔を返してくれた。

一部〜完〜

引火点（後書き）

ここまで読んで頂きありがとうございました。
二人の恋愛が始まったココで、一旦コチラは完結扱いにさせて頂きます。
月見里百合子が主人公の『半径三メートルの箱庭生活』を読まれている方は分かると思うのですが。『発火点』で描かれるこの段階は実はハッピーエンドと呼べる状況ではありません。
起承転結でいうと承までの内容です。
二部は１２月１日より再スタートします。

疑問点

通じなかったギャグを説明するのと、伝わってなかったと思われる告白を確認し言い直すのは、どちらが恥ずかしいのだろうか？

「私のお土産の感想が、喰う気ないって、チョットひどくない？」

月見里さんは子供っぽく、唇を突き出して怒った表情をしている。まあ、怒っているというよりムクれているというのが正しい表現か。沸騰点が低い為に、彼女である月見里さんはキレて怒るってことは殆どない。

彼女が甥っ子と行ってきた宇宙科学博物館で買ってきた、宇宙食のお土産についての会話をしていた。正直いって、パッサパッサのスナックみたいな感じで美味しいというわけではなかった。不味いというわけではないけど。

「だから、宇宙食だけに、空気ない味って……だから『空気』がないって」

『ああ』と小さく言う月見里さん、ようやく通じたようだけど、ギャグって丁寧に説明すればするほど面白くなくなるものだ。

「分かりにくい～」

月見里さんは大げさに溜息をつく。

俺はこの月見里さんに、夏の花火大会で告白して、彼女もそれを笑顔で答えて晴れて恋人同士になった。それから一ヶ月程たったけど喧嘩なんて一切なく、仲良く平和に付き合っている。でも、なん

なのだろうか？　この二人の妙な平和すぎる状況は。平和なのはいいけど、恋人同士になったなら、もっとホラ、色々あってもいいと思うのだけど。なんとも穏やかで、昭和初期か？　という感じの清らかな関係を続けている。

彼女には門限があるので、仕事ならともかく遊びで十一時超えると親がいい顔しないという事もあり、泊まりなんて真似はもっての他というのもあるけれど、キスくらいはしてもいいと思う。しかしそれすら出来てない状況。

この身長差だと、自然な流れでというのがチョット難しい。それに彼女からそういったアプローチが一切ないというのはどういう事なんだろうか？

そこで疑念が沸いてくる。もしかして俺の告白は通じていなかった？

「こんどはどこぞの、空気の缶詰でも買ってくるよ、それなら喰う気もわくでしょ？」

身体を寄せて横腹をツンツンしながらコチラを見上げる月見里さんの様子を見下ろす。いや、普通単なる友達に対しては親密すぎるスキンシップでしょうコレは。

もしかして月見里さんはバージンでそういった事に奥手だとか？

いや彼氏は今までいたみたいだし、そういったシーンのある映画のコメントからして、バージンではありえないドキツイ事言ってくる事がある。

となると、通じていなかった？　でもソレを確認するのって凄い恥ずかしい。

『俺達って、今つきあっているよね？』

『俺の事、ちゃんと彼氏と思ってくれている？』

何て聞けばいい？　もし通じていてそのつもりだったら、こっちが下心いっぱいでガッツいているようではないか。

『え！　そういうつもりだったの？　分かりにくい～』

という感じで、驚かれても困る。

――とりあえず焦らず、落ち着こう。月見里さんという女性をジックリ観察しその本心を探らねば。

毎週、デートまがいの外出を俺としているということは、彼女の中で一番俺が近しい男性であることは間違いないだろうから……多分。

そんな事をコチラが悩んでいるなんて気付いてもいない月見里さんは、メールが届いたらしい携帯をチェックしている。

「そういえば、大陽くん来週の土曜日、映画ブロガーのオフ会に誘われたんだけど、一緒くる？」

俺はその誘いをどうするべきか悩む。ブログもなくオンでつながってもいない俺が、いきなりオフでつながっていいものなのか？

「大丈夫なの？　俺いっても」

月見里さんはニコっと笑う。

「単なる、映画好きの集まりだから！　他の人も恋人とかも平気で連れてきているし」

「じゃあ、行こうかな」

そう答えながら、月見里さんの言葉を、どう解釈すれば良いのか悩んでいた。

※　※　※

オフ会は、居酒屋の個室において行われた。もともとネットでそういった交流を楽しむ方ではなかったので、初めてのオフ会はいろんな意味で新鮮だった。月見里さんは『月』というあだ名っぽいハンドルネームだからまだよいが、ポックリさんとか、猫大王とか、恥ずかしい名前の人もいて、呼ぶのにチョット照れを感じるのは俺だけだったようだ。

「私のブログにも『太陽』さんの名前できてくれている人です」

彼女は俺をそうやって紹介する。俺は自分の名前をちょっともじって『太陽』にしたのだが、皆は『月』という女性に、『太陽』と名乗る仲良い知り合い、という事でなんともニヤニヤした笑顔を返してくる。

「仲いいんだね～　今日もデートしてきたとか？」

猫大王さんの言葉に、月見里さんは、ニッコリ笑い頷く。

（肯定したということは、やはり認識されていた？）

俺はチョット気分をよくする。

「いいな～なかなか趣味の合う人って見つからないんだよね。それで彼女に引かれてふられたり」

ノアールさんが羨ましいようにつぶやく。

「いやいや、映画の趣味は合わないんですよ、この人とは。微妙にジャンルが違うんですよ」

月見里さんはそう、返す。

「でも、一緒に映画楽しめているんでしょ？」

その言葉に「うーん」と悩んだ声をあげ、その後ニッコリ笑う。

「だから、一緒に楽しめる映画は、太陽さんと楽しんで、短観系は別の人ってかんじですよ」

「月ちゃん、浮気は駄目だよ～」

猫大王さんの言葉に皆が大笑いする。

えっと……どういう事、ソレって？　なんとなく、先日女友達と映画行く際にも、『デート』といった言葉をいってきた事を思い出す。

とりあえず、分からない事を考えるのを止めて、その場を楽しむことにした。確かに映画好きでワイワイ語り合うのは面白かったし、

そうやって友達に紹介してくれたと言うことを、前向きに考る事にした。

「今日は、大陽くんもいたから、スッゴク楽しかった」

別れ際の彼女の言葉で、今日は満足するとしよう。

七割以上の可能性で彼女には告白は通じていると思うことにした。

疑問点（後書き）

来年の2月14日に完結を迎えられるように、更新して行きます。なので、バランスを見て一月に三話くらいのペースで更新していきたいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8075u/

三十五センチ下の〇〇点

2011年12月1日23時54分発行